

双松会会報

第7号(「双松」通巻13号・「松高北高同窓会報」通巻第15号)

発行 松江市奥谷町164
島根県立松江北高等学校内 双松会事務局 TEL ④4888・④0655
印刷 有限会社 高浜印刷所 TEL ④3000



母校遠近

会長 柴田午郎

私が松江中学に通っていたのは六十数年前、大正十年頃である。その頃赤山へ行く道の濠端の角に、木造の知事官舎があり、知事さんの門札が掛けてあった。この官舎も古くなって、久しく無住に近い状態に見えたが、最近これが新しく建てかえられて立派になった。周辺の武家屋敷、小泉八雲旧居なども、観光客が増えてだんだんきれいに整備されている。古い卒業生にとってはなつかしい場所だが、城山の森もますます濃く繁り、お濠のカイツブリこそ居なくなつたが、昔より一段と美しくなつた。

島根県は松喰虫の被害日本一と報道されているが、一本松の虫害予防には、消毒はもちろん、肥料をやつたり、柱を立てたり、学校当局も大変に気を配られたようだが、そのお蔭で、ますます松の元気がよくなり、われわれの在校当時よりも、一層樹の勢いよく育つて来た。ありがたいことである。今年が学校創立百周年にあたる

という。学校では九月にその記念行事を行い、講演会や音楽会等がいろいろ計画されていると聞く。詳細は別に発表されるであろうが、百周年といえは短い期間ではない。一度は西川津町の田圃の中へ移つていた母校が、再びもとの赤山へ帰るなどという事は、めつたに考えられぬことである。故田部長右エ門氏等の努力もさることながら、母校の運命のようなものさへ感じられる。赤山へ帰つたために、グラウンドは狭くなつた。新しいグラウンドもいろいろの問題があつたが、まだ期待しているものが出来上がらないが、これ等のマイナスを考へても、なおこの赤山復帰の意味は大きいと思ふ。百周年と聞いて、今更ながら考えさせられる。生徒諸君のスポーツについても、いろいろ現況を聞いたが、華やかに喧伝される部もあれば、一向にうだつたのがらぬのをなげく部もあるようだ。スポーツと教育との関係は、いろいろむずかしい問題もあつて、われわれ素人が私の心の片隅から離れなくなり、その後凡氏にお会いするたびに、その手がかりはないものか一度たずねてみようと思つても失礼にあたると思ひ遠慮したままになつて来た。

偶然というものは信じ難いもので、たまたま小泉家で古い手紙の整理をしておられたところ、本校にゆかりのある手紙が発見され、凡氏から本会の会員である福間彰氏を通して私に連絡があつた。その手紙がくしくも、私が知りたかと思つていたヘルン先生の写真に関するものであつたことはこの上ないよろこびであつた。

創立百周年の贈りもの 三浦富登

本校の図書館にヘルン先生の古い肖像写真が掲げてある。ご承知のように先生は明治二十三年九月から一年有余、本校の英語科の講師として教鞭をとられていた。

古手紙盆待たずして里帰り(小泉時)の句に小泉家のヘルン先生ゆかりの地松江によせられる温い気持ちに伝わってくる。さて、ご寄贈いただいた手紙は、

この偉大な文豪を旧職員としてつづつ本校の誇りを、いつまでも後世の者に伝えたいとの願いを込めてこの写真が掲げられたことは容易に推察できるものであるが、いつ、だれが掲げたものであるかを知る者はほとんどいない。

写真の古さからみて、時の移りかわりとともにそのことを語り継ぐ者も次第にいなくなり今日に至つたものと思ひ、その記録も、調査の手がかりもないものとあきらめていた。ところが、今年二月本校の生徒会行事の一つである自治デーにヘルンの生涯についての講座を開き、講師に曾孫にあたる小泉凡氏を迎えたこともあつて古い写真のこと

が簡単にあれこれ無責任に発言の出来ないことを感じるが、この頃日本の一流会社の社長さんなどで、七十歳を越した老人が、若い頃中学や大学で、野球の選手だつたとか、柔道は何段であつたなどという思い出話をテレビで聞くと、スポーツは単に学校で優勝を目ざすなどということよりも、人間一生の運命を左右する力のあることを感ずる。各スポーツ部門のよき発展と、よき指導を祈りたい。

創立百周年 記念行事・事業

- 一、記念式典・講演 九月二日 演題 明日の日本と世界を考える (サッカーの世界) 講師 長沼 健(日本サッカー協会専務理事)
- 一、記念音楽鑑賞会 九月一三日 世良 明芳(松高一期) 鳥取女子短大教授 声楽家 世良 讓 (バス) ジャズピアノニスト 長岡 慎(一七期) 東京フィル・ホルン奏者 大岩 篤郎(一八期) オペラ歌手 平山 和子(三一期) ピアノ奏者 吉田ゆかり(三三期) 声楽家(ソプラノ)
- 一、百周年以後の十年史発刊
- 一、松中校旗の新調
- 一、起雲館資料室の整備

以上 十年史は森安章教諭を編集委員長として総勢一三名の執筆による労作で三〇〇ページの冊子である。将来編集される何十年史、何百年史のための資料的価値のあることを基本方針として編集してある。 中印の旧制中学校の校旗は年二回、入学式と卒業式に、式台に飾ることにしている。近年老朽化が目立ち、出し入れが無理な状態になり六〇万円かけて新調した。旧校旗は起雲館の資料室に保存することにしている。 創立九十周年には北高の赤山復帰を決議宣言し、百周年を機に校舎の移転改築を完了し、百周年記念行事として第二グラウンドの整備が完了すれば、北高の教育環境はすべて整うことにならるのであるが、残念ながら第二グラウンドの整備については、なお曲折が予想される。百周年を契機として、関係者の理解と協力を求めて、整備の促進を計らねばならない課題が残されている。

松くい虫

久方ぶりに見る双松に、立ち入り禁止のための柵ができています。根を踏み固めず、表土を柔らかくほぐし、施肥や、雨水が十分に根にとどくようにとの配慮である。一方正面門柱横にあつた景色の良い大きな松が、松喰い虫にやられて、切り倒されてた。大きな松一本が無くなることによつて風景がこんなに淋しくなるものか、イメージが一変してしまつた感がある。五九年から六〇年にかけて松九本が、それ以前にも何本かの被害があり、現在校地にある古い松は六九本になつた。 その代表である双松は明治二九年に松中が殿町から赤山に移転が決定したとき、所有者塩野家から永久保存を条件に寄贈されたものであるだけに、その管理保全には代々大変な努力がなされてきた。「最近土壌の崩れがひどく松の根が露出、衰弱の色さえ見えはじめた。松中五〇年(昭和七年)記念の力によつて、すでにあつた支柱の補強、ワイヤーで両方の木を連ね、高さ二メートルの石垣を設け、更に一畝の土盛りをして芝生もつけ各面に階段をもうけた」。その後昭和四一年には支柱が鉄柱に替えられ、さらに百周年記念行事(昭和五四年)として九九八、〇〇〇円を投じて支柱を全く新しく頑丈にし、ワイヤーの位置も変えて恒久的なものとして置かれた。

ここ数年は専ら松喰い虫に冒されぬよう、消毒、施肥等細心の注意が払われており、双松だけは年四回、他の松は三回の消毒が欠かされず、昨年だけで約七〇万円の費用がかかつています。こうした努力の甲斐があつてか、双松も周辺の松も含め、ことに樹勢がよく、翠色も濃く見事である。ちなみに昭和四〇年当時双松の年齢を測定された山本武敏氏によると樹齢は一五〇年ないし二〇〇年とされている。 一方、昭和五七年には松苗一〇〇本が校地周辺に植樹された。この樹齢は七年か八年、大きく成長したものは既に四〇にも達するものがある。このように双松および周辺の松に寄せる愛情がくばり、つねに変わることなく引き継がれている。双松二世も、三世も、すでにすくすくと育っている。

東京双松会の近況

宇山 厚

東京双松会は、昭和三十年十月十四日に旧制島根県立松江中学校の卒業生有志によって母校同窓会の東京支部として結成された。

かつて長年松江中学の校長として生徒達を薫陶された西村房太郎先生が八十歳になられたことを祝賀して、東京ステイションホテルに卒業生六十二名が集まった時のことである。

昭和五十二年から会長、木佐長久、細田菊雄などの常任幹事がいろいろと会の運営に当たられたが、本部の田部長右衛門会長、柴田午郎副会長(現会長)、国會議員の佐野広、竹下登、細田吉蔵の三氏(記録上の順序による)など、各界で活躍の名士が本会の総会に臨席して盛り上げられ、本会の基礎が固まった。今日でも熱心な後輩達が受け継いでおり(後記参照)、本年十一月二十九日には第三十一回総会を開くことにしている。

このように、青年の頃ががやがやしい伝統のある母校で学んだことに誇りをもち、すぐれた先生方、友人達に数々のなつかしい思い出をもつ卒業生達が、お互いの間で親しいまじわりを続けているのである。

名称は「東京双松会」だが、昭和三十一年第九回総会には旧制松江中学校の後継校ということで新制松江高等学校の卒業生が加わり、その後松江北高、南校、東高の卒業生を迎えるようになっていった。つまり、これら松江各校で学んだ人達の会となった。そこで、そのような会にふさわしい名称はないものかと協議し、会員の皆様にも相談したが、思いつかない。結局、旧来の名称をそのまま使うことにして、今日に至っている。

行事としては、年一回の総会のほか、幹事会などの会合で会の運営を進めている。会合には年配者の出席が多いが、若い人達も積極的に参加するよう希望している。他方、会員の皆様は広い地域に住み、それぞれ多忙な生活をしているので、交通にかなりの時間を要する東京地方では、会合に出席したいと思ってもそう出来ない場合が多いのは、やむを得ない。

毎年の総会は、約百名が出席して賑やかな楽しい集いである。本会のきたり通り、興味深い問題に通じている会員から講話を聞くことにしているが、遠路はるばる来臨される松江北高、南高、東高の校長先生が母校の近況についてお話し下さることも、私達の大きい喜びであり、総会の大切な事項である。それから最長老の先輩の音頭で乾杯して懇親会に移り、余興を楽しんだ後、会員それぞれの母校グループ毎に赤山健児の歌、校歌、応援歌を高らかに合唱し、閉会となる。

現在会員数は約千三百名である。年少しずつふえてはいるが、東京地方に住む前記各校の卒業生の中には、本会の存在すら知らない人達がいるので、新入会員の募集に努めようという話合っている。また、毎年松江北高、南高、東高を卒業して、進学とか就職のために上京する諸君が、東京双松会に入会するならば、在京の先輩達からいろいろと助言を聞く機会を得ることもなり、コンクリート砂漠といわれる東京地方においてもいくらかの潤いを感じるよすがとなるのではあるまいか。本会では彼等の入会を歓迎している。

最後に、東京双松会では、前述したように、会員一同がそれぞれの母校に深い関係を持ち、母校において先生方の指導の下に若々しい生徒諸君が、勉学にまたスポーツに、充実した成果をあげつつあると聞いて、大変よろこんでいる。美しい自然に恵まれた環境の中で、明日の日本になって立つ気力あふれる後輩達が育つことを期待している次第である。

なお、本会の役員等は次の通り。

- 一、会長 宇山 厚
副会長 日置高雄、千代 健、松垣龍蔵、上村桂一郎、木佐安允、新石正雄
常任幹事 細田菊雄ほか二十五名
監事 成瀬 恭、勝部哲男
顧問 岡田文彦、近藤英明、萩原憲三

二、本会への郵便物あて先
〒340草加市新善町三四一三
木佐方

昭和61年度 第1回役員会開催

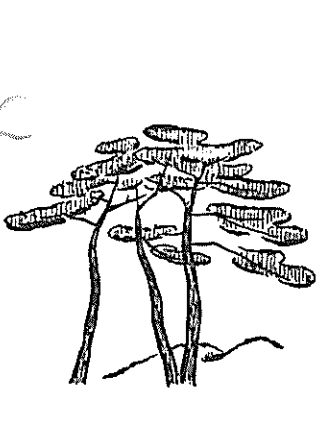
本年度第一回役員会は、常任監事五十八名、校内幹事十七名の出席を得て、去る五月二十六日(月)に一文字屋ホテルを会場に開催された。会議は柴田午郎会長、三浦富登学長長の挨拶にひきつづいて、柴田会長を議長に選出し、次の議題について慎重な審議が行われ、全て原案通り承認されました。

昭和60年度 会務報告

昭和60年度会計決算
昭和60年度会計予算
役員改選
各期代表80名出席
会報発行・発送
名簿「双松」刊行
近畿双松会(羽衣荘にて)50名出席
本部出席者 大田教頭・庄司東部双松会(広瀬町富田山荘にて)

安来能義地区50名出席
本部出席者 吉野・北尾
東京双松会(有楽町「日本クラブ」にて)80名出席
本部出席者 学校長・奈良井

米子双松会(米子ホテルにて)50名出席
本部出席者 大田教頭・庄司



昭和60年度 双松会会計決算書

Table with columns: 収入, 支出, 合計. Rows include 入会金, 繰入金, 繰越金, 雑入, 雑出, 雑費, 雑収入, 雑支出, 雑収入, 雑支出.

昭和61年度 双松会会計予算書

Table with columns: 収入, 支出, 合計. Rows include 入会金, 繰入金, 繰越金, 雑入, 雑出, 雑費, 雑収入, 雑支出, 雑収入, 雑支出.

昭和60年度 決算書

Table with columns: 収入, 支出, 合計. Rows include 総収入, 総支出, 雑収入, 雑支出, 雑収入, 雑支出.

昭和61年度 予算書

Table with columns: 収入, 支出, 合計. Rows include 総収入, 総支出, 雑収入, 雑支出, 雑収入, 雑支出.

事務局 坂本 育穂

昭和61年度の役員会を7月13日、松江市の婦人会館で開催。役員の出席は8名で昨年より少なかったが、美都町から屋敷、弥栄村から徳田の両氏が遠来。学校より塚本教頭、宮崎、後藤の両先生と坂本の4名が出席。藤原会長はあいさつの中で、役員は任期3年が本年で切れるが来年は役員の増員をしたいこと、地域同窓会が昨年は皆無の模様だったのを今少し活発にしたいこと、これについては事務局に連絡してもらえば従来どおり10人以上の会には1万円、それ以下は5千円の補助をする、とのべた。

続いて60年度決算報告はスナリ承認されたが61年度予算については、特に今年度の全国通定体育大会に昨年どおり5万円の補助を行うことが決定された。因みに今年度の全国大会に出場する種目は、軟式野球、男子バレー、卓球、柔道の個人と団体、剣道の個人、それに軟式テニスの団体と個人が初出場である。選手はいずれも日立生で総数は約50名にのぼる。

61年総合体育大会終わる 無念! 男女総合十一位

昭和六十一年度の総合体育大会は前...

北高生がんばる!!

最低のものである。しかし、終わったことを...

陸上競技部 女子一〇〇M 六位 安達 二位 安達...

女子団体 三位 藤野・小笠原 バドミントン部 女子団体 三位...



今春の進路状況

今春の浪人生の進路状況は、別表の61年3月の欄のとおりです。

国公立大学の合格については、現役生諸君が8クラス分を単純に10クラスに換...

北高 一 部活の現状

このような標題で書くよう係から依頼がありました。

短大・各種学校関係では、鳥根県立女子短大25名受験...

折にふれ練習を中断してその時のプレをみながら...

今後とも、優秀な人材を得、ほとんどの練習で部活の成果を挙げること...

Table with columns for years (58, 59, 60, 61) and rows for university types (National, Private, etc.)

得ない面が出ています。来春は、国公立大の受験複数化など...

の採用が大幅に増えている現状に照らしても、今後も志願者がアップすると...

昭和六十一年度 学園祭

統一テーマ「足跡... 新たなる創造」

期日 文化祭 九月十二日(金)十三日(土) 体育祭 九月十四日(日)

文化祭 ○講演 ○記念音楽鑑賞会(卒業生の世良氏)

○映画会 ○バザー・食堂 ○北高生フォーラム

○フリートーク(旧北高生の主張) ○二年ルーム出し物 他

○競技 ○北高ページェント(旧仮装行列) ○ファイナルレ(ソーダ節等)

本年度の学園祭は、前記のような日程で開催されます。

本校生徒は文武両道、学業と部活の両立が求められ、一層限られた時間内での密度の高い練習こそが私達の目標と...

名譽心づも

松中四十七期(昭和二年卒)

藤岡 茂

母校松中の創立百周年を迎えた事は誠に慶賀に堪えませぬ。衷心より御喜び申し上げます。

本年は天皇在位六十年、私達の卒業六十周年、母校の創立百周年、と重なり実に意義ある年である。本年四月一日、投稿者三十名に依る同窓会誌「赤山の思い出」を刊行した。四月五日(土)に松江市東茶町、ときわ旅館に於て同窓会を開催した。先ず六道湖畔にて同窓会を撮影し、午後五時より開会した。東京より飛田人徳、岡村波三、の両君を始め県内外より十九名参集した。君を始め県内外より十九名参集した。久し振りの会合で想い出話は尽きなかつた。酔いがまわる程に余興には日本舞踊、ダンスを踊る者、長唄、艶歌を歌う者、銭太鼓を演ずる者等いろいろ。年齢は皆七十八〜八十歳のロートルであるが若い者には負けない元気がいっぱいあるが宴会であった。終りに赤山健児の歌を合唱し再会を約し散会した。尚私達が中学五年生の時、創立五十周年の祝賀提灯行列に参列した事を想うと実に感慨無量である。母校の益々の発展と皆様の御多幸を祈つてやみません。

松中五十六期(昭和十一年卒)

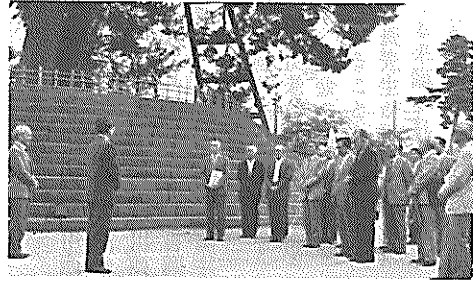
双松に、五十年の思いを寄せて

▼卒業五十周年を記念した大会を五月十日開催。集う友四十一名、これは戦没二十五名を含む物故者七十二名(四一%)の期だから、これまで最大の集会となった。

▼総会の議事が終わった時、東京の湯浅君が動議を提出。「明日、赤山を訪問するが、二本松は三浦校長の陣頭指揮の管理でますます健在とのこと。この際われわれも協力し全員が資金を提出して、半世紀に亘る双松への思いを示したい。皆さんどうか」と、住年の端艇部名コックスを想わせるリードで書き出した。「賛成だ。いくらにするか、ここで案を出せよ」と、これは決断の男、広島吉田君。

▼湯浅君ははや、議長の調整などまたない。「五十周年だから五十万円として、各人一万円ずつ頼む。オラが閉会のと、出口で戴くけん、よろしく頼みます。」(拍手)——これで決定。その晩、懇親会のメートルのあがったこと、あがったこと。

▼さて二日、双松の下で三浦校長に現金を贈呈。一同は懐しい校旗を囲み、五十年の昔に還つて、いとも神妙に校長のご挨拶に耳を傾けた。(写真)



松中六十七期(昭和二十二年卒)

山口 栄一

県外から十三名の参加で総数八十名の同窓会は五月十七日水明荘で催しました。田黒君(オキ汽船社長)の歓迎挨拶で始まり全員紹介が行われました。県外参加者は夫々コメントを求めました。見られた顔も沢山ありますが初めての顔も何人か居ります。今回の参院選挙で初当選した吉岡吉典君も参

旧制・松中のボタン

開校百周年記念祝宴に際し、かつての制服姿(スポンに黒線のある夏服)で校旗を振っていた今村です。

大変なつかしがられ、それを母校起雲館へ寄贈したらという意見が出ました。遺憾ながらボタンの今頃ありふれたボタンです。若し昔の制服又はボタンだけでもお持ちの方がありませんでしたらお送りいただけませんか。ついでに制帽或いは帽章だけでもお持ちでしたらお送り下さいませ。昭和五年卒業 洋服商 今村 亀太郎 松江市新築町七二二四 Tel(〇八五二)四六五七

松高六期(昭和三十年卒)

佐藤 達雄

「や、お久しぶりだ。元気かい。全然変わっていないな。こんな会話がロビのあちこちで聞かれる。昭和三十年度松高第六期生の三十年振りの同窓会開会前の一幕である。昨年八月十日、ホテル一畑に八名の恩師の方々、同窓生は北は北海道から南は九州まで全国から一八〇名が集まった。三十年振りの顔、顔、顔。それはなんとなく三十年前の旧松高校舎に居る様な錯覚を覚えた。しかし三十年はさすがに長い、十数名の物故者もあつた。開会は半故者黙禱に始まり、校歌の大合唱、半年がかりで準備をして来た我々実行委員には胸にジーンと来る一瞬であつた。

毎年一月十五日成人の日には東京で同窓生の例会があり、松江から私の他に二三名が毎年参加している。近畿では一昨年六月第二回同窓の集りがあり私と山本君が参加、三十年記念同窓会の参加をお願いした。その成果が今回の一八〇名の大同窓会になったのだと思ふ遠路参加してくれた同窓諸兄に感謝の気持ちで一杯であつた。

松高十期(昭和三十四年卒)

竹内 誠

昨年この「双松」で案内いたしました卒業二十五周年同窓会は、昨年八月十七日に予定通り開催しました。卒業のときの相の恩師の先生十人を含む百

四十人の出席があり、会場の東急イン大宴会場が狭く感じられる程の大盛会でした。

もと山陰放送アナの目次(旧姓桑原)紀代美さん(三三)の司会で、物故者への黙禱、会長挨拶、松江市のテレビピア推進委員である山陰中央テレビ井原紀夫君(七九)による松江市の将来についての話、母校現況報告、恩師の先生のスピーチのあと宴にはいりました。遠く千葉、東京そして九州からも多数の帰省参加があり、中には海外出張中から帰国した人まであり懐かしい顔、積もる話に三時間がまたたくまに過ぎ、まだ語り合いたい名残を惜しみつつ再会を約して閉会しました。その後クラス毎に、夜の松江に語りだし、深更まで「わあが……」、「おらが」といった調子で昔日に返つて語り合ったことでした。

次は、卒業三十年となる、六十四年頃にも思つています。そのときは、今回出席出来なかつた人も是非お出かけ頂き、さらに盛会となることを、楽しみにしております。

我が十期の同期生もいろいろな分野で活躍しています。九Rの浜崎辰夫君は、奥さんの、かいけいこさんと二人だけの劇団「二人の会」をつくつて、昨春秋に奥さんの出身地宮崎につづいて

て、この六月に松江と出張で旗揚げ公演をしました。我々十期の有志も応援し、新聞やTVも大きくとりあげ、当日も二人の熱演は観る人に深い感銘をあたえて、公演は大成功でした。(二人の益々の発展活躍を祈りたいと思ひます。)しばらく母校の松江北高に同期の人がいませんでしたが、この四月から、九Rの平木君が勤めて居ます。これを機に十期が益々団結したらと思つて

十六期の皆様その後お元気ですか。昨年八月十一日に日共道湖にて卒業二十周年の同窓会を開催致しましたことろ、太田、木戸両先生を始め九十六名(女性四十三名)もの多くの方々に御出席を賜り、幹事一同感謝申し上げます。席上、関東に多くの同期が居るので是非東京でも開催されたらと渡部俊太郎君にお願ひしたところ、開催したのご案内を戴きましたのでご紹介いたします。

「十六期二十年東京地区同窓会を二月一日キャピトル東急で開催し五十一名(内女性十七名)の参加者を得、同窓生ならではの心暖まる楽しい一時

を過ごした。関東地区を中心に広く案内状を送り、静岡、栃木、群馬など遠方からも参加者があつた。(中略)なごやかに一時を過ごし元気に再会する事を誓ひ、なごりを惜しみつつ散会した。(文責渡部)

皆様の御多幸をお祈り申し上げます。最後に来年の正月に厄落しを兼ねて又開催しようかと思つております。詳細は後日御案内しますが、何かご希望でも有れば長谷川宏君か私にご連絡下さい。

「十六期二十年四月母校で娘時代教師をとつたことのある小学校に就職を得た。だが頭一君等子供の将来を考へて高松は松江市に選り、もじみさんも松江の小学校へ転勤出来て、一家は松江に移り住んだ。

事務局異動

大田達雄(事務局長) 学校教育課へ 原 亮(高四) 松工併定へ 金岡敏統(高九) 同右 岡野良夫(事務局長) 益田高より 安部英輔(高五) 三刀屋高より 平木 栄(高一〇) 横田高より 仲佐和幸(高二) 矢上高より 井口 環(高三) 広島大卒 木村真弓(高三) 松江北高卒 双松会幹事長 馬場純一氏 (中四四) 本年五月二十九日、御逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

寄稿

山本幡男君 (その三)

松中四十六期 田平 式

引き揚げて身を寄せた津家は村切の旧家だったが、時代の急変でもはや戦前の旧家では通らなかつた。人の幼児を抱えてもじみさんが現金取入のため選んだのは魚の行商だった。かつて旧家のお嬢さんが魚の行商をするには大変な決心がいった。五箇は海岸でも魚がないので約二十軒離れた西郷港まで行って仕入れて持ち帰つて売るので。真夜中の二時に起きて暗い夜道を独りで歩いて、「隠岐には強盗も泥棒も悪人は居ないのだから……」と自分を励まし、納得させながら知らぬ間に小走りして行く。途中でどうでも通り抜けねばならぬ百米ほどのトンネルがある。暗く恐ろしい、でもここを通り抜けねば西郷には行けないのだ。勇